壇ノ浦の鬼火

下村千秋

青空文庫

一

天下の勢力を一門にあつめて、いばっていた平家も、とうとう源氏のためにほろぼされて、安徳天皇を奉じて、壇ノ浦のもくずときえてからというもの、この壇ノ浦いったいには、いろいろのふしぎなことがおこり、奇怪なものが、あらわれるようになりました。

海岸に、はいまわっているかにで、そのこうらが、いかにもうらみをのんだ無念そうなひとの顔の形をしたものが、ぞろぞろとでるようになりました。これは戦いにやぶれて、海のそこに沈んだ人びとが、残念のあまり、そういうかにに、生まれかわってきたのだろうと、人びとはいいました。それで、これを「平家がに」とよび、いまでも、あのへんへいけば、このかにが、たくさん見られます。

それからまた、月のないくらい夜には、この壇ノ浦の浜辺や海の上に、数しれぬ鬼火、——めろめろとした青い火が音もなくとびまわり、すこし風のある夜は、波の上から、源氏と平家とが戦ったときの、なんともいわれない戦争の物音が聞えてきました。また、そうした夜など、舟でこの海をわたろうとすると、いくつもの黒い影が波の上にうかびあがり、舟のまわりにあつまってきてその舟をしずめようとしました。

土地の人びとは、もう夜になると海をわたることはもちろん、海岸へ出ることさえできなく

なりました。しかし、それではこまるというので、みんなよって相談をして、壇ノ浦の近くの赤間ガ関（今の下関）に安徳天皇のみささぎと平家一門の墓をつくりました。それからそのそばに、あみだ寺をたてて、徳の高い坊さんを、そこにすまわせ、朝に夕にお経をあげていただいて、海の底にしずんだ人びとの霊をなぐさめました。

それからというもの、青い鬼火も、戦争の物音も、舟をしずめる黒い影も、あらわれなくなりました。しかしまだときどき、ふしぎなことがおこりました。平家の人びとの霊は、まだじゅうぶんには、なぐさめられなかったとみえます。つぎの物語はこのふしぎなことのひとつであります。

二

そのころ赤間ガ関に、法一というびわ法師がいました。この法師は生まれつきめくらでしたので、子どものときから、びわをならい、十二、三才のころには師匠に負けないようになりました。そして、いまでは天才びわ法師としてだれでもその名を知っているようになりました。

さて、多くのびわ歌の中で、この法師がいちばんとくいだったのは、壇ノ浦合戦の一曲でありました。ひとたび法師がびわをひきだし、その歌をうたいはじめると、なんともいえないあわれさ、悲しさがひびきわたり、鬼でさえも泣かずにはいられないほどでありました。

この法師は、だれひとり身よりもなく、また、ひどく貧乏でした。いかに、びわの名人とはいえ、そのころは、まだそれでくらしをたてるわけにはいきませんでした。すると、平家の墓のそばにあるあみだ寺の坊さんが、それをきいて、たいへん同情をし、またじぶんはびわも好きだったので、この法師をお寺へひきとり、くらしには、なに不自由のないようにしてやりました。法師はひじょうによろこびました。そして、しずかな夜などは、とくいの壇ノ浦合戦を歌っては坊さんをなぐさめていました。

それは春の宵でありました。坊さんは法事へいってるすでした。法師はじぶんの寝間の前の、えんがわへでて、好きなびわをひきながら、坊さんの帰りを待っていました。が、坊さんは夜がふけてもなかなか帰ってきませんでした。法師は見えない目を空にむけ、なんとはなし、もの思いにふけっていました。と、やがて裏門に近づく人の足音がして、だれか門をくぐると、裏庭を通って法師の方へ近づいて来ました。坊さんの足音にしては、すこしへんだと思いながら、耳をかたむけていると、とつぜん、ふとい声で、ちょうど武士が、けらいを呼ぶように、

「法一。」

と、よびかけました。法師はぎょっとして、すぐ返事もできずにいると、かさねて、さらにふとい声で、

「法一。」

「はい……わたしは、めくらでございます。およびになるのは、どなたでしょうか。」

法師は、やっとそう答えることができました。

「いや、おどろくにはおよばぬ。」

と、声の主は、すこしやさしい調子になり、

「わしは使いのものじゃ。わしのご主君は、それは高貴なお方ではあるが、多くの、りっぱなおともをおつれになり、いま赤間ガ関に、おとどまりになっていられる。さて、ご主君は、そのほうのびわの名声をおききになり、今夜はぜひ、そのほうの、とくいの壇ノ浦の一曲をきいて、むかしをしのぼうとされている。されば、これより、わしといっしょにおいでくだされたい。」

この当時は、武士のことばに、そうむやみにそむくわけにはいきませんでしたので、法一はなんとなく気味悪く思いながらも、びわをかかえて、その案内者に手をひかれて寺をでかけました。案内するひとの手は、まるで鉄のように、かたく冷たく、そして大またに、ずしりずしりと歩いていきます。そのようすから察すると、そのひとは、いかめしいよろいかぶとを身につけた、戦場の武士のように思われました。

やがて、その武士はたちどまりました。そこは、大きなりっぱなご門の前のように思われました。しかし、このあたりには、それほどに大きな、りっぱなご門は、あみだ寺の山門よりほかにはないはずだが、と法師はひとり思いました。

「開門。」

武士は、こう高らかにいいました。と、中でかんぬきをはずす音がして、大きなとびらはしずかに開かれました。武士は法師の手をとって、中へはいりました。しっとりとした庭を、しばらくいくと、またおごそかな、りっぱな大げんかんと思われる前に、たちどまりました。武士はそこで、また高らかにいいました。

「ただいま、びわ法師、法一をつれてまいりました。」

大げんかんのうちでは、ふすまをあける音、大戸をあける音がして、やがて、やさしい女たちの話し声が聞えてきました。その声で察すると、その女たちは、この高貴なおやしきの、召使いであることがわかりました。その召使いの女のひとりが、法師の手をやわらかにとると、こちらへと、大げんかんのうちへ案内しました。それから、すべるようにみがきこんだ、長いろうかをいくまがりかして、かぞえきれないほどの、部屋べやの前をすぎて、やがて大広間へ案内されました。そこには、かなりおおぜいの人びとが息をひそめて、いならんでいることが、そのけはいでわかりました。やわらかな衣ずれの音が、森の木のすれあうように聞えました。

法師は、大広間の床の間と、はんたいがわと思われるところに、ふっくらとしたざぶとんの上にすわらせられました。法師はきちんとすわり、持って来たびわをひきよせると、耳もとで老女らしい声がしました。

「平家の物語――壇ノ浦を弾じてください。」

三

法師はしずかにびわをとりあげました。大広間のうちは、水をうったようにしんとなりました。はじめは小川のせせらぎのように、かすかにかすかに鳴りだし、ついで谷川の岩にくだける水音のようにひびきだして、法師のあわれにも、ほがらかな声が、もれはじめました。その声は一だんごとに力を増し、泣くがようにひびきわたりました。その声につれて弾ずるびわの音は、また縦横につき進む軍船の音、矢のとびかうひびき、甲冑の音、つるぎの鳴り、軍勢のわめき声、大浪のうなり、壇ノ浦合戦そのままのありさまをあらわしました。法師はもはやわれを忘れて歌っていました。

「なんという名手でしょう……ひろい国じゅうにも、これにまさるものはありますまい。」

「まことに、わたしも生まれてはじめて聞きます。」

そういうささやき声が、そちこちから聞えました。

法師は、ますます声をはりあげ、ますます、たくみにびわをひきました。平家一門の運命も、いよいよきわまり、安徳天皇をいただいた二位尼が水底ふかく沈むだんになると、いままで水をうつたようにしんとしていた広間には、いっせいに悲しげな苦しげな声が上がりました。その声は、だんだんと高まって、はては大声で泣きさけぶ声さえ、聞えてきました。

法師はなんともいえない気持にうたれながら、しずかに一曲をひきおわりました。広間の人

びとの声は、それでもまだしばらくのあいだ、なげき悲しみつづけていましたが、いつか流れがたえるようにきえていくと、こんどはまた、恐ろしいほどのふかいふかい沈黙と、静寂が広間いっぱいにこもりました。

しばらくしました。と、さっきの老女の声が、また法師の耳もとでしました。

「かねて聞いてはいましたが、そなたのびわには、こころから感服しました。ご主君も、ことのほかおよろこびになりました。お礼に、なにかよいものをおあげしたいが、旅のことで、なにもなくお気のどくです。けれどこれからあと六日の滞在ちゅう、毎夜来て、こよいの物語を聞かしてくだされば、ありがたいことです。あすの晩も、おなじ時刻に使いのものをあげますから、どうぞおいでくださいまし。なお、念のためもうしそえますが、ご主君は、ただいま、おしのびの旅をなされていられるのですから、このことは、どのようなことがあっても、いっさいひみつに、だれひとりにも話さぬよう、くれぐれもおたのみもうします。」

まもなく法師は、また女の手に案内され、大げんかんへ来ました。そこには前の武士が待っていて、法師をあみだ寺までおくって来てくれました。

四

法師が寺へ帰ったのは、夜あけ近くでありました。お坊さんも、夜おそく帰って来ましたの

で、法師はもう、寝ていることと思い、法師の部屋へ見にもいかなかったのでした。それで法師のその夜のことは、だれもしらずにしまいました。もちろん法師は、なにも話しませんでした。

つぎの夜でありました。法師はれいのとおり、寝間の前の、えんがわにいると、昨夜のとおり、重い足音が裏門からはいって来て、法師をつれていきました。大げんかんの前、召使いの案内、長いろうか、大広間、そして、しんといならぶ人びとの前、そこで法師は昨夜とおなじように、壇ノ浦の物語をひきました。そうして、人びとは、またも泣き、むせび、悲しみました。法師は深い感激にうたれて、寺へ帰って来ました。

すると、寺ではめくらの法師が、だれの案内もなしに寺をぬけだしていることを知りました。つぎの朝、法師はお坊さんの前へよばれて、やさしくいいきかされました。

「えらく心配しましたぞ。めくらがひとり出をするのは、わけても夜中にでるのは、なによりあぶないことじゃ。どういうわけで、出ていくのか。わしは寺男にさんざんさがさせたのじゃ。いったいどこへいきなさるのだね。」

「これは申し上げられませぬ。てまえのかってな用事をたしにでかけたのです。どうもほかの時刻では、つごうがわるいものですから。」

法師はただそう答えました。

お坊さんは、法師のようすがあまりへんなので、これはすこしあやしい、もしかしたら悪

霊にでもとりつかれたのかもしれない、と思って、それ以上は、きき ただそうとしませんでした。そのかわり、ひとりの寺男に、ひそかに法師のようすを見はらせることにして、もし夜中にそとへでていくようなことがあったら、あとをつけろといいつけておきました。

　すると、はたしてその夜も、法師はびわを持って、寺をひとり出ていきました。寺男はちょうちんに灯をいれて、そのあとをつけていきました。その夜は、雨もよいの陰気なくらい晩でありました。しかし、めくらの法師は、まるで目あきのようにさっさと歩き、いつか年よりの寺男をあとに、くらがりの中へきえてしまいました。寺男は、そのように早く歩く法師を、ふしぎにも気味悪くも思いました。

　寺男は法師がたちよりそうな家を、一けん一けんさがしまわりました。が、どこにもいませんでした。寺男はこまって、ひとり、ぼつぼつ浜辺づたいに寺の方へ帰ってきました。と、おどろいたことには、狂ったようにかき鳴らすびわの音が、どこからか聞えてくるではありませんか。しかも、そのびわの音は、まちがいなく法師のひくものでありました。

　寺男は、ただ意外に思いながら、音のするほうへ近づいていきました。いったところは平家一門の墓場でありました。いつか雨は降りだしていました。一寸先見えぬ闇夜、寺男は、両足が、がくがくふるえましたが、勇気をつけて、びわの音のする墓場の中へはいっていきました。そして、ちょうちんの灯をたよりに、法師をさがしました。するとこれはまた意外のことに、法師がただひとり、安徳天皇のみささぎの前にたん座して、われを忘れたように、一心

ふらんに、びわを弾じ、壇ノ浦合戦の曲を吟じているのでありました。そうして、法師の左右には、数しれぬ青い灯、鬼火がめらめらと、もえていたのでありました。寺男は、こんなに多いさかんな鬼火を、生まれてはじめて見るのでありました。寺男は一時は声もでないほどにおどろきましたが、やっと、心をおちつけて、

「法一さん、法一さん、あなたは、なにかにばかされていますよ。しっかりしなさい。」

と、耳もとでいいました。

しかし、法師は、寺男のことばをききいれるどころか、ますます一心に、ますます高らかな声で、吟じつづけています。

「法一さん、法一さん、どうなされたんです。こんなところで、なんのまねをしているんです？」

すると、法師は怒ったように寺男を制して、

「しずかになさい。だまっていてくれ。高貴な方々の前だ、ご無礼にあたるぞ。」

寺男は、これには、あっけにとられるばかりでした。もう、しようがないので、寺男は力ずくで法師をひきたて、その手をしっかりにぎって、むりやりに、寺へひっぱってきました。

寺の坊さんは、びしょぬれになっている法師の着物をきかえさせ、あたたかいものを食べさせて、できるだけ心をおちつかせました。なにかに心をうばわれたようになっていた法師は、そこでようやくわれにかえりました。そして、お坊さんや寺男が、じぶんのために、どんなに

心配をし、骨をおったかをしり、たいへんすまないように思い、そこで、なにもかも、お坊さんにうちあけてしまいました。

お坊さんはそれをきくと、

「法一さん、それは、おまえのふしぎなほどに、たくみなびわの腕まえが、おまえをそういうところへみちびいたのじゃ。芸ごとの奥に達すると、そういうことがあるもので、これはおまえの芸道のためには、よろこばしいことじゃが、しかし、あぶないところじゃった。昨夜、おまえは平家の墓場の前で、雨にぬれて、すわっていたそうじゃ。おまえは、なにかまぼろしを見て、そうしていたのじゃろうが、いつまでも、そうしていたら、平家の亡者の中へひきこまれ、ついには八つざきにされてしまうところじゃった。もう、どこへもいってはならぬぞ。わしは、今夜も法事で、るすをするが、おまえが使いのものに、つれていかれないように、今夜は、おまえのからだを、よくまもっておかねばならぬわい。」

そこで、法師をはだかにして、ありがたい、はんにゃしんきょうの経文を、頭から胸、胴から背、手から足、はては、足のうらまで一面に墨くろぐろと書きつけました。そしてまた、着物をきせて、お坊さんは、

「わしは、まもなくでかけるが、おまえはいつものえんがわにすわっていなされ。やがて、れいの武士が来て、おまえの名をよぶだろうが、おまえは、どんなことがあっても、だんじて返事をしてはならぬ。万一返事をしたなら、おまえのからだは、ひきさかれてしまうのだ。また

人のたすけをよんでもならぬぞ。だれもたすけることはできぬのだからな。そうして、おまえがりっぱに、わしのいいつけをまもりおおせたなら、もう、おまえのからだから、危険なことは消えさってしまう。おまえはもう、おそろしいまぼろしを、見ないようになるのじゃ。」

と、ねんごろにいってきかせました。

五

法一は、いいつけられたとおりに、えんがわにすわっていました。と、いつもの時刻がきて、いつもの武士が、裏門からはいって来ました。

「法一。」

しかし、法一は息を殺していました。

「法一。」

二どめの声は、おどすように聞えました。が、法師はかたく口をむすんでいました。

「法一。……こりゃへんじがないぞ。いないのか。」

と、武士は、えんがわへよって来ました。

「おや、ここにびわだけある。が、法一はいない。へんじのないのもむりはない。が、耳だけがあるぞ。使いに来たしょうこに、これを持っていこう。」

こう武士はつぶやくと、法師のりょう耳は、いきなり鉄棒のような指先で、ひきちぎられました。けれど法師は、声もだせませんでした。

武士は、それでいってしまいました。

夜がふけて、お坊さんは帰って来ました。そして法師が、りょう耳から流れでる血の中にすわっているのを見つけました。

しかし法師は身動きひとつせず、きちんとすわっています。お坊さんは、びっくりしながら、

「法一、このありさまはどうしたのじゃ？」

と、さけびました。法師はそこで、はじめてわれにかえり、今夜のできごとを話しました。

「ああ、そうじゃったか。いや、それはわしの手落ちじゃった。おまえの耳ばかりへは、経文を書くのを忘れたのじゃ。これはあいすまぬ。が、できたことはしかたがない。このうえは、早く傷をなおすことじゃ。それだけのさいなんで、命びろいをしたと思えば、あきらめがつく。もう、これでおまえのからだから、悪霊がきえさったのじゃから、安心するがよい。」

お坊さんは、そういいました。

それから、この法師には、「耳なし法一」というあだ名がつき、びわの名手として、ますます名声が高くなりました。

（昭２・６）

青空文庫情報

底本：「赤い鳥代表作集　2」小峰書店
　1958（昭和33）年11月15日第1刷
　1982（昭和57）年2月15日第21刷
初出：「赤い鳥」赤い鳥社
　1927（昭和2）年6月号
入力：林　幸雄
校正：川山隆
2008年4月9日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

壇ノ浦の鬼火

下村千秋

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/